

平成 20 年度海外研修派遣報告

東北大学病院 伊藤 大輔

1. 研修に参加した目的とその成果

私が海外研修派遣に応募した目的は、大きく 2 つありました。ひとつは米国における放射線技師の現状と役割を知ること、もうひとつは、世界の最先端に行くスタンフォード大学で最新の技術に触れることでした。特に現在担当している MRI に関しては、7TMRI が稼動しているということで、ぜひ参加したいと思いました。

米国と日本の放射線技師の大きな違いは Clinical と Research が分かれていることです。Research に従事する放射線技師(RT)は、MRI 装置に関して安全面、また研究での運用面を全面的に任されていました。研修の総責任者である Moseley 先生も担当の RT に MRI 室入室の許可をとっている姿は印象的でした。また、臨床に従事する RT は、マニュアル通りの撮影を行うことが重要とされていましたが、臨床医から撮影に関してアドバイスを求められたり、RT が撮影を追加したりすることもあるようでした。いずれも RT が非常に頼りにされ、チームの一員として認められている印象を受けました。7TMRI に関しては、実際にガントリの中に入る機会を頂きました。ゆっくりゆっくり入って行きましたが、頭が入ったところで眩暈が強くなり、ギブアップしてしまいました。実際の撮影では、チューニングにマニュアル操作が必要だったり、SAR の問題で一度に数枚しか撮れないなど、まだまだ臨床で使うには問題が残っていると感じました。しかし、講義などを通じて 7TMRI の計り知れない将来性を強く感じました。

2. 日本と米国の放射線技師制度の違いをどのように感じたか

米国では、CT や MRI , US など各モダリティで専門技師が存在します。資格の維持には数年ごとの更新が必要ですが、資格を取ることで重要なポストを任されたり、待遇面が向上したりすることにもつながります。それらが大きなモチベーションとなっていると感じました。また、専門資格をもつことで、研究面、臨床面で専門家として頼りにされる存在になっていると感じました。しかしながら、同じ RT の中でも格差が生じたり、専門性を重視するあまり知識や技術が偏ったりしてしまうという問題点も垣間見えました。日本でも専門技師の制度化が進んでいますが、日本は日本独自の仕組みを作る必要があると感じました。

3. 今回の研修で得たことを今後どのように生かしたいか

今回の研修では、ほんの一部ですが米国の医療の現状を知ることができました。最新の技術や施設の素晴らしさはもちろんのこと、研究者に対する待遇の良さなど日本では考えられない環境でした。また、米国らしい合理的な考え方は大きな刺激となりました。それと同時に日本の良い点も再認識することができました。臨床と研究が非常に密接ですぐにフィードバックできる点、さまざまなモダリティを経験していることで多角的に研究ができる点、そして何より日本の放射線技師のレベルの高さを感じました。今後は、研修で得た知識や体験を生かしつつ、もっと日本の技術や考え方を世界にアピールできる研究をしていきたいと思えます。



写真:花の 51 年組です。たくさんの仲間達と毎晩語り合いました。私の大きな財産です。(夜更かし注意!) 右から 4 番目が著者。